随想　ヒトのこころ

～言霊の力が日本の将来の方向を大きく変えるかもしれない～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

十月二十二日の衆議院選挙で、自民党と公明党からなる与党は三一三議席を獲得し、定数の三分の二を占める結果となった（小選挙区定数二八九、比例代表定数一七六、合計四六五）。これを受けて安倍晋三首相は、二十五日山口那津男公明党代表と連立合意に署名した。これで、希望の党、日本維新の会、日本のこころを合わせた改憲勢力が八割を越えたことなる。

当選内容を概観すると、対立構造が《自公の与党》に《希望の党・日本維新の会》、《立憲民主党・共産党・社民党等》の三極が争う形に変貌し、前の民進党は、それぞれ明暗を分ける結果となった。与党が圧勝したのは政権批判の票が分かれた結果、身内で票を奪い合ったためである。

選挙前には、安倍政権による、安保法《共謀罪》の国会における民主的な手続きを無視した強引な成立に端を発し、森友学園・加計学園の疑惑問題（俗にモリカケ問題と呼ばれる）に加えての閣僚の異様な発言等々で、疑念が大きな問題と発展していた。こうした条件下で、野党を全体的に連合すれば自民党の一強構造を覆せる可能性が見えていた。このような状況を見据えて、くだんの小池劇場が幕を上げた。

九月二十五日に立ち上げた新党・希望の党がそれである。蓮舫前代表から民進党を引き継いだ前原新代表が、この舞台へ相乗りしようとした心理は、政治に素人の著者にも何となくわかる気がする（賛同するわけではない）。

しかし、圧倒的な都民の支持を得たことを後ろ盾に、東京都政において独特の言い回しで好意的な注目を集めることに成功していた小池都知事が、（自信過剰の故か）、九月二十九日の記者会見で、記者の質問に対して民進党合流組の一部を「排除する!!」と発言してしまった。この発言一つで小池劇場の場の雰囲気がガラッと変わり、希望の党に対する逆風が吹き荒れたのである（風節によれば、小池知事はこの発言を悔いて《食事ものどを通らない》状況であったらしい＝東京新聞、十月二十五日、一面）。

その結果、最大与党であった民進党は三つに分裂、選挙後の最大野党は元の民進党から分かれた《立憲民主党》となった。分裂の結果、元の民進党議員数八七人から五四人となり（選挙前に慌ただしく立ち上げた立憲民主党議員は一六人であったから、躍進と表現されている）、勝利というには心もとない成果を残した。ご存知のように、小池氏が代表の希望の党は選挙前の五七人から四九人に減少。惨敗と評されている。

大勝したという自民党も元の二九〇人から二八〇人に減少していることを考えると、野党の事前の混乱を踏まえると、安倍政権への不審の念は熾火（おきび）のよ

うにくすぶっているとも見える。

この結果を踏まえて自民党、安倍政権が今後の政治をどのように進めるかはここでは問題にしない。

今回の選挙を通して著者が痛感したのは、《ヒトのこころ》が《いかに移ろいやすいか》ということである。

民意を得て都知事に就任した小池氏が《都民ファーストの会》をもって自民党を圧倒的な力でねじ伏せたこと、かつてのカリスマ都知事を高圧的とも感じられるパワーでやり込める姿と、モリカケ疑惑や大臣たちの失言、さらには思い上がったかのような国会でのヤジは応対姿勢に嫌気がさしていた浮動票は、安倍氏に代われる誰かを探していたように感じられる。しかし、前の民主党政権の無様な経過と結果に懲りていたことから、自民党を離れることにも不安を感じていたことも事実であろう。

それを見越して、満を持しての小池劇場開幕であれば自民党は戦々恐々で受け止めたはず。そこへ例の「排除いたします」発言。

《排除》を辞書で引くと《押しのけてそこから除くこと》とあり（スーパー大辞林）その語感は強い。それ故に小池氏に過信があるとの評価が下されたのであろう（著者もそう感じる）。加えて、見える政治を標榜しながら、自身の都政はブラックボックス化してきていた。都民ファーストの会で看板役を引き受けていた（かに見える）音喜多駿・上田令子の両都議が十月五日に離党する、というさらに強い逆風が足を縛った。

いったんそちらへ流れそうになった浮動票は、空気を読んで流れるのを止めた。他に選ぶものがないから、安定している自民政権。やむを得ず引き続きの安倍政権を容認、といったものが、今回の選挙結果であろう。

流れをいっぺんに変える言葉とはいかに恐ろしいモノであろうか?!　日本には《言霊》思想がある。故に望ましくない言葉を口にすることをためらう人は多い。

今、小中学から若いサラリーマンに至るまで、イジメが大きな社会問題になっている。そのイジメの大多数は、言葉を介してなされている。言葉で人の命をも奪うことができるのである。それほどに言葉の力は大きい。

先の《排除する》発言にしても、政治思想が異なる人と同じ政治活動ができないことは自明の理である。このときに言葉を選んで「政治理念の一致する方々と政治活動を共にしたい。理念の異なる方々とはそれを共通のものにする努力を重ね、それでも方向性が異なれば、別の道を選ばれることをお勧めします」とでも言っていれば、風の吹き方は変わっていたかもしれない。この言葉で、日本の将来が大きく方向を変えることになれば《言霊の力》は思っているよりずっと大きいのかもしれない。

晶文社出版の『男子劣化社会』という書籍がある（フィリップ・ジンバルドー・ニキータ・クーロン著、高月園子訳）。書物の本旨とは異なるが、次のような記述が頭に残った。

《ほぼすべての社会で「持たざる者」は「持てる者」より疑い深い。おそらくそれは「持てる者」の方が他者より誠実で丁寧な扱いを受けるからだろう。アメリカでは黒人は白人より、経済的に豊かな人より、大都会住民は小さな町の住民より、犯罪の被害歴がある人はない人より、離婚歴のある人はない人より、社会の信頼度が低い（『孤独なボウリング』米国コミュニティの崩壊と再生　ハーバード大学・ロバート・パットナム教授）》。

ここでいう、疑い深く、社会からの信頼の低い人々こそ不満分子であり、不満の言葉が生み出す力（言霊）がこれまでのより良い日本を違った方向に導くのではないか？　この記述に、人間が潜在意識に持つ本能的な何かを感じて、やり切れない思いに追い込まれるのは著者一人なのだろうか？